

Title	若き高木壬太郎：静岡での日々
Author(s)	川崎, 司
Citation	キリスト教と諸学：論集, Volume26, 2011.3：69-97
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3261
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

若き高木壬太郎

——静岡での日々——

川崎 司

はしがき

学園改革の嵐が吹き荒れていた四〇年ほど前、秩序への違和感に導かれるまま「考えること」をはじめた私の目の前に、詩人・北村透谷がふいと立ち現れた。

歴史の創造に参加したい一心で、透谷のいう〈人生の一大秘鑰〉を尋ねるうち、透谷〈二なきの友〉櫻井明石と、透谷の〈最も信認すべき論敵〉山路愛山と、明石・愛山の終生の知己となる〈高潔なる品性家〉高木壬太郎と出会うことで、日本の近代を《神》とともに歩んだ彼ら基督教徒の間に流れる水脈の中に、私は「永遠の生命」を感じることができた。恩寵であった。

高木壬太郎の次の一文には、飾りのない誠実な友情によって結ばれた彼らの生きざまが鮮やかに刻まれている。

『最も大なる事業ハ最も静に為さるもの也。吾人豈必ずしも人耳を聳動するの事業を為して以て快とするを

要せんや。願くハ基督の徒よ瀑布となりて響かんよりも、渠となり河となりて舟楫を通ぜよ、汽笛となりて鳴り渡らんよりも、石炭となりて汽^マ関車を動かすの力となれ。是豈最も貴きことならずや。”（「平凡の生涯」『聖書之友雜誌』明二八・五）

透谷の追い求めた（人生の一大秘鑰）もこの文章の奥に隠れているはずだ。

本稿は、透谷の生命を受け継ぎ、眼を事業と功利の外に放つて前途の光を望みつつ、牧師として主筆として教育者として歩んだ壬太郎の氣高き一期の出発点ともなる静岡での日々を、資料に寄り添いつつ辿りながら「永遠の生命」に少しでも近づこうとした細やかな試みの一である。

一 遠陽榛原人

元治元年五月二十日（一八六四・六・二三）、壬太郎は、遠江国榛原郡中川根村上長尾（現・静岡県榛原郡川根本町上長尾）に、里正・医師の家系で農を業とする高木源左衛門・その子の長男として生まれた。

古くからの友・池田次郎吉は、壬太郎と故郷を次のように形容している。

「花橘も茶の匂ひと歌はれた静岡県でも、特殊なる茶の産地に川根と云ふ処があります。川根の地は前に大井川の清流控へ、後に緑の山を負ひ、空氣清澄塵芥の揚るなき為茶の葉は自然に清く、之をもつて製したる茶は茶碗の底に沈殿物が殆溜らないといふのを以て有名であります。此清き茶の産地川根こそ我坎堂高木先生が

生れられた土地なのであります。香ばしきかほり、すみにすみて底迄濁りなき程の清らかさ、シカモ其中に、人の疲れを癒し睡りをさますの力を持つて居る川根の茶、それは敬虔なる神の僕、有徳なる君子人を表徴するに近いものではありませんまいか。果然彼と是とは共に山高く、水長きの間に生れたのであります。^①

生涯のいちばん幸福な時を、壬太郎は、微妙なる長尾の山、大井の水に触れて過ごした。『遠陽榛原人』^②を称する所以である。

八木又左衛門・高木源左衛門兄弟は、今日という自由人。福沢諭吉の開国思想を喜び、家人はもとより近郷にまでその説を教えて回ったという。『西洋事情』『学問のすゝめ』『文明論之概略』などは『家庭の教科書』となり、諭吉の、旧思想を破壊して新思想を扶植した意気と、権威や勢力におもねない独立独行の自尊の精神が、しらずしらず壬太郎の向学心を奮い立たせた。^③

壬太郎は、キリスト教を聴いて後、精神的文明＝西洋の道徳をなおざりにする諭吉に『懺悔の情』をいだいたこともあったが、四民同権を主張し、時代の要求に鋭く応じたこの遠見なる大革命者を壬太郎は（最も好める人物）の一人として敬い続けている。^④

学制発布にともない明治七年一月、智満寺（高木家菩提所）の大伽藍を校舎に充て開かれた長尾学校に入学。河村八郎次（浜松県学区取締）が大井川上流地方巡視の際、「今日勉めずとも、明日ありと云ふことなかれ」（『小学読本』）との訓に励まされ学にいそしむ（全校の模範）壬太郎に眼を見張ったのは、翌八年頃のことである。^⑤

明治九年、長尾学校の新校舍落成式で、壬太郎は生徒総代として「祝辞」を読み上げた。首席教員として迎えられた近藤鈴太郎の回想に、若き壬太郎の面目が現れている。

（余ノ始メテ此地ニ到ルヤ玲瓏タル玉ヲ含有スル璞石ノ若キ小童アリ伶俐ニシテ進退周旋常ナラス此ノ山間僻地ニシテ此人アリ即壬太郎氏ナリ 壬太郎氏質朴穎悟ニシテ強記見ルコト聞クコト一タヒ耳目ニ触ルレハ直ニ之ヲ吸収シ再ヒ忘ルゝコトナシ故ニ余モ面接スル時常ニ妄言ナラス何事モ信実ナルコトヲ旨トシテ応接スルコトニ注意セリ：（中略）：壬太郎氏ノ質朴ナルハ土地ノ粹ヲ得タルモノ而シテ此レニ加フルニ穎悟強記ヲ以テシタルナリ 斯ノ若キ人ヲ徒ラニ奥山ニ捨テ置クハ惜ムヘキモノト思ヒ静岡県立師範学校ヘ入学セシムヘキコトヲ余ヨリ伯父君及父君ニ勸メシニ學資ナク且ツ此ヲ離レテ他所ニ出テタトヒ人物トナルトモ家ノ為メ村ノ為メトナラスト云ヘリ余曰ク學資ナクハ何トカ方法アルヘシ且此ノ如ク俊秀ナル人物ナレハ成業ノ後ハ豈村ノ為ノミナランヤ國ノ為天下ノ為トナルヘシト云ヒ其儘余ハ第十三番中学区（即榛原郡鬼頭郡磐田郡）巡回訓導ヲ命セラレテ長尾学校ヲ去レリ^⑥）

百事業創の中、賢き忠実な教師と親愛すべき同窓の友によつて「美しき要素」を育まれ、明治十年秋、下等小学全科を修了。直ちに「志ある者は単身万里をも往く」と叱咤する父の意をくんで、遠州掛川村の漢儒（蘭学者とも）・岡田清直の家塾に入り傍ら掛川学校へ通うことになる。^⑦

遠陽の純美な自然と淳厚な人々の織りなす原風景をあとに「立志」なる笈を負い、狭い郷里の天地より見たことのない一三歳の少年は独り、病弱な母の心配を引きずりながら、西南戦争後の政論よせる実世界を指して苔滑らかな小路をたどり、金谷から佐夜の中山を歩いた。^⑧

二 静岡師範覺

父・伯父の許しを漸く得て壬太郎は、明治十一年春、追手町の堀端に灰色ペンキ塗り木造二階建の大建築を誇る県下最高唯一の学府・静岡師範学校に入学する。^①

静岡に来てまもなく壬太郎は、師範覺と外壕の石垣をへだてて城内西北隅に建つ石造二階屋の異人館あたりに二人の西洋人Ⅱカナダ・メソジスト教会派最初の宣教師 Davidson MacDonald とその妻を見かけた。家が曹洞宗に属し、祖母が神職の出で、母もおのずと敬神の念深く神仏への尊崇を教えられてはいたが、風潮に揺らぎ宗教には極めて冷淡になってしまっていた壬太郎の〈豆大ノ眼睛〉には、〈人民の品行を改良する法教師^②〉の質朴な巨軀も、婦女子教育を実践し夫の活動を支える才色備えた麗容も、ただ「物珍らしく」映るばかりであつた。^③

〈明治の中期に於て静岡の持つた双璧〉とたとえられ最も親しく交わることになる〈天才的な文章家^④〉山路弥吉との出会いは、弥吉が壕頭学校（師範学校と隣り合わせの附属小学校）上等三級を修了したところで学資つづかず同校の助教員となつた明治十一年か翌十二年頃である。^⑤

弥吉の「現代日本教会史論」〔『基督教評論』M三九所収〕に（余は當時を回顧して日本人民の獸欲を抑制すべき威權の甚だ微弱なりしを驚かずんばあらず、…（中略）…余の自ら記憶する所に依れば静岡師範学校の学生は其頃東京新誌（『漢文戯作雑誌』）を読むもの少からざりき。とある。壬太郎はこの惡風に謹嚴をもつて当たり〈同窓何れも眼を刮して懼れを懷かざるはなく、教師も亦同じ名後世上るべしと評し合へる〉ほどに名声を広めた。^⑥

明治十二年、〈静岡師範学校の秀才〉壬太郎は、一等小学師範学科から新設の高等師範科に転入する。同級生・根

岸貫がその経緯を留めている。

「…僅か五人の一学級なりしことは、余り贅沢にして不審に思はるゝ次第なるが、此頃の学務当局も、小学校教員養成と共に中学校及師範学校教員養成の必要を感じ、師範学校生徒中の優秀なる者を抜いて、更に高度の教育を受けしむべき計画を案じ、第一回は明治十一年に、三人（黒川正、平賀敏、望月宗一）を慶応義塾に県費を以て留学せしめたるが、其卒業期の明治十四年には、次で三人乃至五人を留学せしむる意志にて、其準備の爲め特に五人の一学級を編成せしものなり、仮に称して高等師範科と云い、教科目は専ら英学漢文に重きを置き、記憶に存する限りに於いては、スポンソン万国史、チャンバー中古史及近世史を用ゐる、語学には英国人さへ傭はれて、教授時数は英学科が約半ばを占め、漢文科にては通鑑覽要、左伝、易経、春秋等に及び、科学にてはロスコー化学の原書に依り、些かなれども其の実験をもなしたりしなり。…」^⑤

「異日濟黎民」を念じながら明治十四年の慶応義塾遊学を待ち望んでいた壬太郎に最初の挫折がおとずれた。学務当局の計画の基礎が弱く明治十三年の県会で派遣中止と決まったのである。^⑦

壬太郎が、「男子空しく死なず」と励みあう弥吉と、印刷事業の発達していない当時にあつて青年書生間の最も高尚な快楽とされた文学雑誌の刊行を思いついたのはこの頃のことであろう。

二人は、すでに文学雑誌『弘智新誌』（M一三・九創刊）の編集に携わつていた増田富次郎にその経営方法について教えを請うている。^⑧

明治十三年十月、『呉山一峰』創刊。^⑨

同じ頃、同窓の戸田鉦吉と雑誌『美学珠林』を発行し〈文学教学連馳〉を實踐していた根岸貫は、その『吳山一峰』の内実を次のように記している。

『文学雑誌「吳山一峰」は本局を「行余社」と称し、主幹兼編輯人に山路弥吉と署名したるが、実は重に師範学校同窓生の計画にて、局名や編輯人署名杯は、県立學生の身分として、印行上に許されがたかりける為に、此頃より既に、学校以外に自由研究の天地を有せる山路弥吉氏の名を借り、尚且「行余社」の所在地には、同じ山路氏の寓所（『静岡鷹匠町一丁目四七番地』を充てたるものなりき。されば番号の発行を重ねたるに拘らず、将又山路氏は、此頃早くも家康論の執筆ありたる程なるにも拘らず、同氏の一文を認めず、高木坎堂併に増田香山（高木氏親友増田龍作）両氏の文章斗りが、変名をさへ加へて毎号を賑はし、山路氏としては、未だ愛山といはず当時偃蹇独夫と誌されて、逸詞と題したる詩歌欄に、義経賛なる韻文を觀るに止まれり。』¹⁰

〈静岡あたりにては国会開設の請願に師範学校の先生さへも署名し、土地にて幅利きの人物は大抵其運動に加勢¹¹〉するほど民権論流行の時、壬太郎も政治世界に志を抱いて、この画箋紙一〇ページほどの小雑誌に若き火群を吐いた。

『吳山一峰』は、莫逆の友・山路弥吉（明治十四年『吳山一峰』閉刊後？静岡県警察本署御用掛に就く）に支えられ、初めの目的どおり卒業の日まで七・八号を発行して一校學生の士氣を揮い周囲の畏敬を集めた。¹²

天下をもつて任じ、擬国会で自由保護貿易の可否を討論したり『静岡新聞』に国会開設や条約改正を訴えたりもして〈文章に対する天成の素質〉をみとめられ〈校内弁論界の雄〉とたたえられた壬太郎は、明治十四年五月七日、

特別優秀の成績で自由・独立・進歩・闊大の滲み入る卒業状を手にし、二日後、「噫王猛力功拿破崙力業誠二大矣誠二偉矣瑞軒子未其千億分ノ一タモ真似ルコト能ハスト雖ドモ尚向後勉メテ倦マス学シテ怠ラサルアラハ豈何ソ其千億分ノ一二至ラサルヲ必センヤ」着錦帰故郷ハ未タ之ヲ言フ能ハサル也^①と戒めて一先ず故山へ向かう。

三 小学先生

明治十四年八月二十九日、静岡教育界の有望な新人と期待された壬太郎は、「政治界に雄飛せんとの念^①」を抱いたまま、育英の業の第一歩を駿東郡御殿場村立中郷学校（現・御殿場市立高根小学校）にしろした。その三カ月後に執り行われた同校の新築開校式で壬太郎は祝文を朗読して、校長（三等訓導）の職責を果たしている^②。

昼は学童の訓育に全力を注ぎ、夜は政治・歴史・哲学・文学などの書に親しむ間、社会教育の効用を啓発して良風を守る、博学で覇氣に富み弁舌明快な十七歳の校長に村民の厚い尊敬が集まった^③。滝口源太郎ら教え子の回想からも、郷村の木鐸の音容が伝わってくる。

（…当時の教育法といへば今日より見て非常に低くかつたもので（低いとはあながち悪いといふ意味でありません）注入主義より外なかつたことゝ思はれるが先生（壬太郎）の教育法も注入主義であつたと考へる。而も生徒の個性を重んずることは非常に深かつたもので、当時個性観察簿を作り休憩時等教師監視の外にある生徒の挙動や行為や遊戲等に於ける状況を明細記録して参考したもので、吾々も教室の窓から先生が運動場を眺めて居ることに気が付いた時は何だか怖く思つた（怖がらせる為ではないが）。是等は先生の明なる所で近時個

性尊重の教喧しきを思へば実に敬服に堪えない。…(中略)…先生は学校内部の教育に力を注がれたる外学校以外即ち社会教育にも注意せられた故に卒業生を集めて夜学を開きよく指導誘掖の任に当らる。又常に飲酒の害を説かれて地方風俗の善導に力を尽された。是其の当時にありては何れの地方にても自家用の酒を醸し人にも賄め自らも飲み自然飲食の風習があつたからである。

「学校のやり方を変えた先生」と高根の人々に強い印象を与えた壬太郎は、のち青山学院長になってから、当時の「講釈の注入的教育法を以て品性を強いんとするが如き愚」を痛く思い起こしつつ、夏の御殿場に講演や静養の足を運んだ。

「泰西史鑑。パーレー万国史。西国立志篇。勸善訓蒙。等を読み泰西文明の淵源する処あるべきを思ひしかども基督教を研究せんとの志は未だ起らず、前に静岡浅間神社で聞いた高木喜一郎(交詢社々員)の耶蘇教攻撃演説を論拠に、儒教主義を声高く唱えて信者の非難を浴び、「個人間の論争に止まりては面白くないから新聞紙上にて論議せん」と圭角をあらわにしたのも中郷学校在職中のことである。

再び自由の嵐・民権の雨すさぶ中、壬太郎は身を政党の外に置きながら、(皇室ヲ無窮ニ奉戴シ下人民ノ権理自由ヲ伸暢シテ国家ノ福祉ヲ全フスル)ことを目的に磯部物外らにより全国に先駆けて結成された静岡改進黨の温和に共鳴しつつ『静岡新聞』に政論を寄せたり、御厨懇親会で伊藤欽亮(静岡県改進黨員)を支持し土居光華(岳南自由黨員)を攻めるなど進んで壇上の人ともなった。

集会条令改正追加(M一五・六・三公布)され「黙れ訓導」の暴声高ぶる夏、改正教授法伝習会(於静岡師範学校)に出て御厨教育会幹事の職務を務め、また校長訓導の政談演説・政論の禁止が布達されて十八日後(十一月三

日)には、中郷学校の教員・生徒と世事を逃れ金時山の紅葉を楽しんでいる。壬太郎は秋を最も好んだ。「秋紅(散文)」という筆名もある。^①

その年の冬、根岸貫から一通の手紙が送られてきた。「云く「我等年壮にして小学に老ゆるは豈遺憾ならずや。教育者たらば何ぞ大教育者たるを志さざる、恨む所は学資なきの一事也。謂ふ相共に助けて更迭東都に遊ばん、初め三年は余君の為に資を供せん、君先づ遊学せよ、後の三年は君帰り来りて余の為に資を供せよ。」と。壬太郎は早速この計画を蜂屋学務課長に相談するが賛成は得られず、天下ならぬ県下教育の枠の内につなぎおかれた。

〇壬午歳晚 春風秋風幾去来。光陰如前夢中開。人生空失三分一。志業難成極目哀。^②

偏狭な忠孝仁義説を内容とする「幼学綱要」が布かれて一月あまり後の明治十六年一月五日、静岡師範学校設立以来初めての卒業生同窓会が、平賀敏・伊藤鉉一郎・望月宗一・横山幾弥・高木壬太郎・根岸貫・増田龍作らによつて開かれた。^③ 壬太郎は居並ぶ民権党は、重なる取り締まりと再編策に処世の道を踏み迷っていた。

山路弥吉に(余輩少年彼の影を望で走れり)と言わせた岳南自由党员(『東海暁鐘新報』主幹)・曾田愛三郎^④が東京に去ったあとの静岡で、なお自由改進黨思想を喧伝する土居光華や城山静一(『大阪立憲政黨新聞』社員)・西村玄道(『自由新聞』印刷長)ら名のある論客に対し、壬太郎が、警部の臨監する政談演説会場に客気をふるったのは同年三月頃のことである。^⑤

十二月、上御厨教育会々長を兼務する小学校長・壬太郎は、その功績により静岡県から下された白紬一反を携え、二年四ヵ月、ついに東駿の地を後にする。^⑥

壬太郎十九。(廟堂ノ上ニ立テ天下ノ枢機ヲ握ラン)か、(民間ノ木鐸トナリテ公衆ノ与論ヲ左右セン)か、(學問ノ真理原則ヲ講窮シ碩学大家トナラン)か。^⑦ 頼る資もなく人もなく「東漂西泊・志業常二蹉跎トシテ進マズ」^⑧

四 田舎官吏

静岡改進黨の解散が報じられて二ヵ月後の明治十七年七月、二等訓導に昇任した壬太郎は、榛原郡長・河村八郎次に招かれ小学校巡回訓導（遠江国榛原郡書記十四等相当）に就く。^①

御前崎学校初等科試験が終わった（十月二十九日）あと、果てしなく広がる海原を眺め渡航の日に夢を走らせる壬太郎は、福沢諭吉の『時事新報』や仁田桂次郎の『洋学規範』などにも触発され、思いつのつて密かに米国へ渡ろうとするが、泣いて止める母の前に雄志は熄んでしまう。^②

明治十八年四月十日、人生の一大不幸が壬太郎を襲った。倚門の母・その子が「恨ムラクハ兒ト起居相共ニシ又兒ノ閨門情濃ニシテ呱呱タル愛孫ノ顔ヲ見ルニ及バザルヲ」という繰り言を遺し四十二歳を一期にこの世を去ったのである。^③ 壬太郎はこの時、『平家物語』『源平盛衰記』などから悲哀の思想を強く印象づけられていたこともあって、世の中のいかにも頼りないこと人の命の朝露のようなものであることを沁々悟った。^④

憂愁の身を置いた静波の下宿（大石久吉宅二階）の真向いの大石家（本家）に、壬太郎意中の人・梨花（明治二年十月十四日生。大石五郎平・きし長女）がいた。^⑤

志望と遠く離れていながら、よくこれまでの注入主義を改め（観念開発ノ主義）を小学教員に説きめぐり、榛原郡の教育史を一新し、後になって「余嘗て此郡に教育の任を掌り、余の知人今尚多く此地に住す」と懐かしむ壬太郎であったが、当時人々に向学心なく教員の一部と衝突などもあり、七月、八郎次らの慰留をふりきり辞職。^⑥ 八月一日、蜂屋学務課長兼衛生課長の薦めにより、静岡本庁衛生課（准判任御用掛）に転ずる。^⑦

母を亡くした壬太郎にはこの「榮進」も虚しく（静岡市中を夜更けまでクライストの有り難きを説く耶蘇教信徒の孤軍奮闘ぶりも知らず）、慰めを求めて不夜の町をさ迷うばかりであつた。^⑩

「此迄は生死の問題の如き曾て念頭に浮かびたることなかりしが、最愛の母を喪ひては此問題に逢着せざるを得ざりしなり。然れども当時一般に宗教的気分乏しく殊に静岡の如きは俗悪風をなし、余が先輩にして余を導き斯る問題に思を潜ましむるもの一人も之れなく、却つて余を酒色の巷に誘ふものゝみなりき。されば余も知らず識らず斯る風に誘はれ、酒を煽りて鬱を慰むるが如き道に赴きしが、此は却つて良心の苦痛に逢ふのみにして、それより何等慰安を得ること能はざりき。」^⑪

まさしく「上に向て進むか、下に向て墜落するか・神と結ぶか悪魔と結ぶかの結着点」^⑫にあつた時、『六合雑誌』誌上で安井息軒の「耶蘇弁妄」を駁しキリスト教の真相を明らかにしようとした「弁妄批評」の著者・平岩愼保が静岡教会に着任（明治十七年五月）すると、その卓抜な英語力を頼み教会に出入りしていた山路弥吉（この頃、静岡県警察本署御用掛を辞めた？）や太田虎吉（前志太郡小川学校長）や池田次郎吉（書店擁万堂番頭）らに導かれ、壬太郎は、西洋文化の入り口ともいえる「温暖掬すべき家庭」の扉をたたいた。^⑬

牧師となつて人間の靈魂を救おうとしたのではなかつた。（将来社会に活動せんには漢学と英語を修めざるべからず。自己の意志思想を伝達するには文章に因らねばならず文章は漢学の力に俟たねばならぬ。而して広く世界の事情に通するには外国語を知らねばならず外国語は世界的な英語を修めるに如くはない）と十六、七歳から始めた英語の研學が主な目的であり、弥吉らとは「英語は教はるが断じて耶蘇信者にならず」と誓い合い、平岩の示した

〈無報酬で好い、其代り、英語は一週三回、月水金曜に一時間宛教へるが其後でバイブルを一時間聴くことゝしやう〉という約束も守らず、英語聖書講義には二、三回出ただけであつたが、この〈存在が極めて短かく、時間さへ僅だつた英語会^①〉が、壬太郎ら静岡の青年の知識欲に投合し信仰に入る契機をもたらし、端なくも世路を決めるものとなつた。

基督教演説会の盛況が人の心に光明を点す秋、〈強迫入門^②〉を厳しく拒みながら信仰を告白（明治十九年三月受洗）した弥吉は、その頃のことを次のように記している。

〈回想す明治十七八年の頃我社（＝護教社）発行人平岩愼保氏牧師として静岡教会に在り。彼は其伝道の暇を以て青年を集め英書を教へたり。当時英学の需要太だ盛にして而して地方は牧師に乏しかりしを以て許多の青年は喜んで氏の許に集り来れり。而して見よ其結果は少からざりし也。今日日本メソヂスト教会の要鎮たる麻布教会の牧師たる高木壬太郎氏も甲府教会の牧師太田虎吉氏も実に当時平岩氏に従つて狹隘なる静岡教会にスウキントン万国史の類を研究したる青年の一人たりし也。我社編輯人の如きも亦当時氏が門下に集りて諸子の後に従ひ熒平たる青灯を囲んで英書の研究に余念なかりし也。知るべし、「日本メソヂスト」教会の一勢力はたしかに破窓茅屋田舎教会に出でし也。当時の田舎牧師たる平岩氏に出でしなり。〉（我等年少の頃、人生を沙漠の如きものなりと感じ、浮薄の人情を悲みて世に頼むべきは唯自己あるのみと思ひき。然るに耶蘇教は我に神の国と云ふものあるを教へ、神の国の精神的共同生活に入るべきことを教へたり。此時のうれしき感情は一生拭ひ消すべからず。〉^③

行き先の定まらないまま壬太郎は、十月十四日、母の遺訓を奉じ（河村八郎次の媒酌で）巡回係在職中に一目惚れした庄屋の娘・大石梨花とめでたく婚儀を修め、翌十九年二月一日、材木町六一番地から安西一丁目南裏三三番地に居を移し「処世ノ初歩階梯」を履んだ。²⁰

国事犯事件が相次いでいた。政治的気圧に押し出されるなか結成された私立静岡教育会・静岡青年会の会員となり、また在陵書生懇親会の幹事をつとめる政治青年・高木迂狂（当時の壬太郎の筆名。ほかに迂狂生・東海生・東海迂狂・不為己齋主人など）は、時世を誤らず、正しきを踏ましむべき案内者たらんとした。²¹

天然痘が再び流行の兆しを見せ始めていた。高木衛生課員は、新居に落ち着く間もなく、種痘規則説明と衛生視察の職務を帯び、佐野・城東・磐田・山名・周智六郡へ旅立つ。²²

三十日・百里の疲労も癒えた三月二十六日、河村榛原郡長から「今回教育上ノ改革アルニ際シ卿ヲ以テ甚ダ必要トナス。願クハ卿再ビ来テ本部教育ノタメニ努力セヨ」と懇請されるが、梨花を迎えて処世の感触が変わり、増給・昇等を望む壬太郎はこれを辞退する。

角を矯め（衛生の統計や報告書文案など余り面白くない仕事をも孜々として執筆）していた壬太郎のもとに、『吳山一峰』の同人で、東京大学（古典講習科国書科）に学んでいた田村幸充から一書が届いた。

「云ク、京地昨冬政府更革以来百事面目ヲ改ム。就中文学ノ如キ和漢陳腐ノ学ヲ舎テ西洋日新ノ学ニ傾クノ勢力筆紙ニ尽シ難シ。大学モ某組織相改リ、古典並別課ノ二科ハ其勢可憫有様ナリ。予ハ文部ノ中学科試験ヲ受ケタリ。和学ノ外恐ラクハ落第ナラン。目下東洋英和学校舎長勤務ス。至テ薄給ナレ共西洋人ニ親昵スルヲ得、云々。又云ク、當時出京中ノ蜂屋林両氏二面会ス、蜂屋氏ヨリ君ノ近状ヲ聞知セリ。君上京ノ計ヲナセ、

云々⁽²⁵⁾

かねてからの思いが沸き上がった。

五 運命の関

明治十九年夏、壬太郎は、旧自由党员嫌疑拘引事件（静岡事件）によつて（静岡学生の花）と讃えられた湊省太郎の挫折を知らされる一方、（破窓茅屋田舎教会）（静岡教会）で英書（聖書）の研究に励み、夜遅くまで街頭に立つて「耶蘇演説」をこころみる池田次郎吉・伊志田平三郎・太田虎吉・近藤与七・菅沼岩蔵・根岸道・久永勝成・山路弥吉・吉井文三ら（小さき友人の一群）を目のあたりにしていた。⁽¹⁾

八月八日、「判任官十等」の辞令を受け取つた壬太郎は、憤然「上官人ヲ視ルノ明幾分力乏シキアルニ非ザル歟・悠々日ヲ本土ニ送ル、予ノ素志ニ非ズ」と、静岡師範学校・静岡英学校の恩師・村松一（当時、東洋英和学校講師⁽³⁾）に前途をゆだね、専心神の道を求め始める。教育・衛生・勸業の拡張を願ひ五年がかりで静岡県庁前三の丸の濠端に建てられた「教導石」⁽⁴⁾（賛成員の一人として壬太郎の名も当時の静岡の有識者八一名とともに刻まれている）に蟬の聲が降りしきる厳しい暑さの中であつた。

「人生の一大時期」に出会つた壬太郎の胸には、William Ewart Gladstone (1809 ~ 1898) のような、政治界の偉人であつただけでなく文学や神学にも深い智識を備え、日曜日には必ず教会で礼拝したという、閑日月を有する英雄の「秩序ある生活」⁽⁵⁾への憧れがあふれていた。

Charles Haddon Spurgeon (1834 ~ 1892) を自任する伝道心の熾んな信仰の氣分に富んだ〈田舎牧師〉^① 平岩愼保の心血を注いだ説教からこぼれた譬喩や断案が、疑問を惹き起こしつつ基督教への捷徑を指し示す標となった^②。

村松一の誘いを受け、明年一月の上京を決めたのは八月十六日のことである^③。

同じ夏、壬太郎の家の近く(安西一丁目南裏町一五番地)に澁江保が越してきた。〈精神過労のため毎日新聞を止め、遠州の乾へ引込んで暫らく其処で静養して居たが、其後東京へ歸りがけに静岡へ立寄つた処を旧知の前田五門といふ人に取捉へられ、静岡英学校、文武館及び高等英華学校の三校に教鞭を取ることになつた〉のだという。静岡英学校は校則を變更し(澁江を教頭に迎え)九月一日から授業を再開している^④。壬太郎も弥吉も澁江から英語を教わつた。壬太郎が好んだ Thomas Babington Macaulay (1800 ~ 1859) の流麗雅健な『An Essay』の文義を説き明かしてみせたのも澁江であらう^⑤。

古典からも儒教からも得られなかつた生命を『天道溯源』『真理一斑』『政治新論』など哲学の力を借り疑惑を解きながら一途に神の道を歩みだした壬太郎は、〈人は単に知識が博く深いだけでは人としての資格のないこと、この社会的物質生活以外に人は純真なる精神生活を追わねばならぬこと、金銭や物質だけにあこがれて靈魂の世界を知らずに終るのは動物の生活と異なる所がないことなどを悟り、自分の本来の使命は知育を人に授けるだけでなく、もつと偉大な仕事即ち万能の神の国の存在を凡ての人に伝えて、美しい平和な社会を実現させるにあるのではないか^⑥〉との思いに至り、平岩牧師の懇篤な導きもあり、基督教全盛の時代^⑦の一時の感情に迫られることなく遂に「生涯の運命の関^⑧」を越えた。『日記』に受洗時の心境が残されている。

「十月廿八日 去る八月以降大二悟ル所アリ。教会に至て神の道を尋ね去て聖經を読む。未だ奥蘊を窺ひ尽

す能はずと雖も自ら顧て既往を思へば吾一身は是れ罪惡の淵叢にして神を汚すこと誠に多し、静心熟慮恐懼の念禁ずる能はざるものあり、悔恨亦何ぞ堪へん、断然志を決してバプテスマを受け神の教会に入りて既往の罪惡を潔め来日の救を得ん事を欲するや切なり。…(中略)…将さに来る三十一日を以てバプテスマを受けんとす。嗚呼予が身は昔日の身に非ざる也。願くは主の助によりて是より身を慎み行を改め信徒たるに背かざらん事を。十月卅一日 日曜日 晴 朝起希伯来書第六章を対読す。九時教会に至り牧師の説教を聞く、了て洗礼を受く。願くは之れより神の家族となり身を行ひ過を改め来世に御救を得んことを、アーメン。”

壬太郎は今“天地の人”⁽¹⁵⁾となつて、“基督教を信するに非ざれば自ら高尚なる理想に達し高潔なる品性を養ふこと能はず、日本国民を基督教化するに非ずんば到底日本国を率ひて真正文明の域に進ましむること能はず”⁽¹⁶⁾と信じてることを始めた。

明くる十一月一日、“最も敬重する先輩”平岩愼保の活動を支え青年間の宣教につくした平岩銀子が、“苟くも惡をなさざるを以て満足するなかれ、必ず進んで善事を為すべきなり”との謙遜の美德と果斷な意志を秘めたことばを壬太郎らの心耳にのこし、二十六年十一月のいのちを終えた。⁽¹⁷⁾

翌二十五日、聖誕節のこの日、長女俊子永眠。在世わずか七日。“一生中の一大事”に鬱ぐ壬太郎に扶助と同情を投げかけたのは耶蘇基督であつた。⁽¹⁸⁾

岐路に迷いながらも壬太郎は「死せる人」から「生ける人」となつて、日本の精神的革命に前途の光を望みつつ明治十九年を送つた。

六 福音士

明治二十年一月、壬太郎は「喬木ヲ棄テ迷谷ニ入ル」⁽¹⁾ 思いで町立三島尋常小学校（現・三島市立東小学校）首座訓導の任に就いた。

田町番外三番地の借宅で教案を練り、三島町字仙台の新築校舎に修身・歴史・理科の教鞭を執ること半年（この間、三島女学校・舊花女学校へも出講している）⁽²⁾。静岡事件は（破廉恥の重罪たる強盗）をもつて公判終決（七月十三日）し、風教もくずれ（最早自由でも行かず民権でも行かず甚だ六カしき世の中）⁽³⁾ にあつて、壬太郎は迷谷からの転進を告げた。〈小生此度三島高等小学ヲ辞シ帰岡 肩書ノ場所ニ寓ス 静岡浅間公園側西洋館内〉⁽⁴⁾

〈人間を作る事〉を説き勧めてくれた平岩愼保が渡米のため静岡を去つたあと、⁽⁵⁾ 麻布教会から来た小林光泰の牧する静岡教会の拡張工事の槌音が壬太郎を迎えた。「衣食あれば足れり」と月給二五円の小学先生の地位を棄てた壬太郎はその教会で、語学に秀でた Francis Albert Cassidy (1883 - 1924) に就いて、日本語を教えながら、英語の素養と基督教品性をみがく機会に恵まれた。⁽⁷⁾

十月二十日清水町で「人は其拜む所を択ぶ可し」と題し初めて基督教を説き、十一月二日夜静岡教会で最初の説教を行っているが、神秘的経験なしに哲学的理論から入った壬太郎のその頃の信仰は次のようなものであつた。

「メソヂスト教会で最も重を置く教理の一は神の子たる事を聖霊が信徒の心に直接に証すると申す事でありますが、基督教徒たるものは何人も自ら我は神の子也との確信をもたねばならぬのです。私は自ら基督教徒と

なつた当時の事を考へて見ますと文字の上からは此事が了解せられて居たかと思ひますが実験上からは何となく神を懼れて居たので、安息日^{*}もよく守りますし、其他色々善事をなす事を心掛けましたけれども、実は心から喜んでゐたのではなく、寧ろ神を懼れる心から為したので、神をアバ父と呼ぶ杯申す事は実に出来なかつたかと思ひます。”

「宗教」か「教育」か天職の帰趨に迷いながら、明治二十一年三月三日、壬太郎は、若竹座の壇上から（基督教の勢力目下日出の有様）を証明する大聴衆を前に、「基督教と進化説」の題下、堂々科学万能説を論破した。

翌四日の同会場では、Cassidy が「開化ト品性」と題して弁舌をふるつてゐる。その翻訳者は壬太郎である。character の訳語「品性」^①は、壬太郎「生涯の事業」の旗印となる。

同月二十二日、壬太郎最初の著（訳・編）書『心の写真 MENTAL PHOTOGRAPH 一名嗜好及性質之記録』が届けられた。これは各項目の空欄に各自嗜好するところの事柄を自由に記入して、朋友間の貴重な記録とするもので、巻頭に一例として壬太郎自らの「答え」が掲げられている。

日：明治廿一年二月廿八日 姓名：高木壬太郎 住所：駿河静岡

最も愛する（1）色：黒（2）花：梅（3）快樂：船遊（4）天然物：富士山（5）住所：静岡（6）職業：学者（7）男子ノ名：マルチン・ルーサー（8）女子ノ名：サラ・マルチン（9）宗教家：ウエスレー（10）詩人：ダビデ（11）工人：ハリシー（12）音楽者：ハンデル（13）散文記者：使徒ポール（14）小説中ノ人物：〔無記入〕（15）歴史上ノ人物：ワシントン（16）最も大切ナル書（宗教書ヲ除ク）：私ノ備忘録（17）一日

二於テノ時：日出前（18） 四季ニ於テノ時：秋（19） 欣慕スル男子ノ品性：勇氣、謙遜（20） 同上女子：驕慢、饒舌（23） 得意ト自信スル性質：〔無記入〕（24） モシ他人トナルヲ得バ何人トナルヲ望ムヤ：〔無記入〕（25） 最モ惡ムベキ物：サタン（26） 最モ幸福ト考フルモノ：和合セル家族（27） 最モ不幸ト考フルモノ：不和ナル家族（28） 高尚ナル情ト考フルモノ：愛情（29） 世界中最モ愛ラシキ言辞：「汝ノ罪宥サレタリ」（30） 最モ悲シキ事：「我嘗テ汝ヲ知ラズ」（31） 題目：「神ヲ信ジテ正シキ事ヲナセ」（32）（33）：〔無記入〕¹²

John Stuart Mill (1806 ~ 1873) や Herbert Spencer (1820 ~ 1903) のような時代の思想を導く学者・思想家を夢みて、『神の王国の事業』を担おうとする静岡教会の若き福音士・高木壬太郎の印象は鮮明だ。

四月二十日、帝国議会の開設をひかえ政論雑誌が流行する中、〈東海道の青年を誘起して正当なる道途を歩ましめん〉と、学術・宗教・道徳・経済・工芸・地理・歴史・伝記など多様な分野を内容とする月刊誌『静岡青年会雑誌』が、壬太郎を編輯人として創刊された。¹³ 史学文章を志す弥吉の東都の文壇に登るきっかけとなった「頼山陽ハ徳川氏ノ忠臣ナリ」やカシディの「品性」を論ずる文（壬太郎訳）を収め、数号で廃刊となるが、唯一現存する第三号に掲載された壬太郎の「智識ヲ得ルノ法」には、学問（Ⅱ）「強固な善良な意志、即ち基督を遣はし玉へる書の旨に従はんと強き願、善き心」を最大要素とする主観的真理の追究を我が道と定め、「焰々たる靈火を燃して熱狂せる信仰の徒」と、冷然として深く心を学に潜むる篤学の士との存立を自らに課した壬太郎の決意があらわれている。¹⁴

壬太郎は、清水で藤枝で、一両年に押し寄せる保守排外の逆潮を感じ取っていた。

静岡の青年信徒が、連夜店頭を借り路傍に出て伝道に邁進する夏、「再ひ小学先生の地位に帰らん」との思いが、

郷里に路加伝を説く壬太郎の脳中をかき乱した。

明治二十二年二月十一日に発布された大日本帝国憲法は古来の大禁を解いたものの、依然盛んな守旧思想に外来の新宗教はなお人々の疑懼を免れず、むしろ非宗教的な傾向を進めるものとなった。

三月（一日か二日）再び基督教演説会（若竹座）の講壇に立ち、また五月四日藤枝教会奉堂式当夜、立錫の余地もない聴衆に向かつて壬太郎は、声高く信教の自由を謳った。

立憲改進黨の政社・同好会が、静岡県国家学会が、静岡の天地に経国の業の旗を翻す時、神学博士 George Cochran (1834～1901)（東洋英和学校長）と山中笑牧師（甲府教会）の試験を受け、日本メソジスト教会第一回年会で「教職試験」に挙げられた壬太郎の前に（生命の明界）に通う道が開けた。

「ヤソ教は困つたものだ、高木のやうな教育家を取つてしまつた」という蜂屋学務課長の嘆息をあとに、明治二十二年九月二十一日午前十時半、壬太郎は、妻子を静波の大石家に託し、敬愛する江原素六・平岩愼保・山路弥吉・太田虎吉らの待つ東京麻布東鳥居坂町の東洋英和学校へ向かう。

“過去の観念一時二胸中二湧出して百感禁する能ハす…”

競つて都門に笈を負う「学問病」の学生をも乗せて、中央集権制のレールをひた走るボギー客車に八時間半、壬太郎は離愁と期望の身を揺られた。

【注】

一 遠陽榛原人

- (1) 池田次郎吉『高木壬太郎先生』S七・二・八〔青山学院資料センター〕
- (2) 壬太郎『東海詩稿』M一八〔東京神学大学〕
- (3) 「八木翁追懷録(五)」壬太郎『八木翁紀念帳』T二、「福沢諭吉と現時の基督教會」壬太郎『護教』M四〇・四・二七
- (4) 「実業者間の伝道」M三六・五・二三、「伝道上の勝利を謀るべし」M三七・三・一九、「戦鬪的態度を取るべし」M三八・一・二、「基督教主義学校論(上)」M三八・七・二二、「我國民の精神的素養」M三九・六・二 以上、『護教』、「智能を啓発し徳器を成就す」『青山學報』T九・一二 いずれも壬太郎文「自ら物せられし高木博士の伝記(二)」聖山生纂『開拓者』T一〇・七
- (5) 河村八郎次『無題(壬太郎追想文)』T一一〔東京神学大学〕
- (6) 近藤鈴太郎『無題(壬太郎追想文)』〔東京神学大学〕
- (7) 「父生活史」高木一三『高木壬太郎紀念録作成ノート』T一一〔東京神学大学〕、「人生の重荷」壬太郎『護教』M三六・九・一二、「教權の根本は信念」壬太郎『國民教育』T二・九、前掲「自ら物せられし高木博士の伝記(二)」
- (8) 『日記(M一七・一〇・一五)』、『神学博士高木壬太郎氏講演(明治四拾五年壹月七日 下長尾尋常小学同窓會)』高木吾一速記〔小沢俊夫氏・松下麟一氏・八木伊三郎氏〕

二 静岡師範覺

- (1) 「バチエラ、オブ、デヴィニチー・高木壬太郎君」日本力行會出版部編『現今日本名家列伝』M三六、壬太郎『飄蓬錄』M三二・二・一一〔東京神学大学〕
- (2) 壬太郎『退靜岡師範覺』M一四・五〔東京神学大学〕、「故マクドナルド博士の事」壬太郎『護教』M三二・一一、「倉長巍先生の加奈陀メソヂスト日本伝道概史を読む」池田次郎吉『日本メソヂスト時報』S一二・一〇・一五、「自から物せられた高木博士の伝記」聖山生『開拓者』T一〇・二三、警醒社編『信仰三十年 基督者列伝』T一〇、「生の宗教」壬

太郎『開拓者』T四・一一・一

(3) 「青山学院長神学博士高木壬太郎君」池田次郎吉『明治初期の静岡 第二編』S一六〔静岡県立中央図書館〕「山路愛山氏逝く」江原素六氏談『東京日日新聞』T六・三・一六

(4) 「養生論」山路弥吉『独立評論』T三・七

(5) 根岸貫『無題（壬太郎追想文）』T一一〔東京神学大学〕、『日記（M三〇・六・二九）』

(6) 前掲・根岸貫『無題（壬太郎追想文）』、三輪小十郎編『平賀敏君伝』S六

(7) 前掲・根岸貫『無題（壬太郎追想文）』、『福沢諭吉と現時の基督教會』壬太郎『護教』M四〇・四・二七

(8) 増田守一『追憶』T一一〔東京神学大学〕

(9) 「新年ノ感」香山逸民『吳山一峰』M一四・一〔河村計三氏〕、『自から物せられし高木博士の伝記』聖山生纂『開拓者』T一〇・四

(10) 前掲・根岸貫『無題（壬太郎追想文）』、池田次郎吉『坎堂先生』T一一〔東京神学大学〕

(11) 「夢半百歳」山路愛山『国民新聞』T六・一・一

(12) 前掲・根岸貫『無題（壬太郎追想文）』

(13) 前掲『退静岡師範覺』、『故高木壬太郎博士の思ひ出』池田次郎吉『教界時報』T一〇・二・二五

三 小学先生

(1) 壬太郎『飄蓬録』M三二・八・五〔東京神学大学〕

(2) 『学校沿革史』（御殿場市立高根小学校）、「雜報」小学教員の拜命『東海曉鐘新報』M一四・二・二二

(3) 「青年中心の時代去る」山路愛山『商業界』M四一・一、「非老成論」山路愛山『白金學報』M四二・七、「青年論」山路愛山『新文林』M四二・一〇、「愛山先生（上）」静中堂主人『讀書之友』T二・一〇、「わが父を語る（一）」生いたち

高木二郎『広報 中川根』S三七・五〔中川根町教育委員會〕、「自から物せられし高木博士の伝記」聖山生纂『開拓者』T一〇・四、「田舎雜感」壬太郎『護教』M三七・一〇・一

(4) 滝口源太郎『無題（壬太郎追想文）』T一一〔東京神学大学〕

- (5) 御殿場市立高根小学校 創立百周年記念事業委員会編『自戒』S五〇
- (6) 「自己教育」壬太郎『聖書之友雜誌』M二八・一一、『日記』(T五・七・二九、八・二八、T六・五・三、六七、六・八)『
- (7) 「如何なる書籍に由て基督教の思想に接触せしや」(一)高木壬太郎『護教』M四二・一〇・一六
- (8) 前掲・滝口源太郎『無題』(壬太郎追想文)、『日記』(M二三・一二・五)『
- (9) 前掲『飄蓬録』、『御厨懇親会』、『函右日報』M一五・三・三
- (10) 静岡県立教育研究所編『静岡県教育史 資料編(上巻)』S四八
- (11) 筆者不明『金時山の霜葉』M一五・一〇(『東京神学大学』、『故高木壬太郎博士の思ひ出』池田次郎吉『教界時報』T一〇・一二・五
- (12) 前掲『飄蓬録』
- (13) 「静岡師範学校卒業生同窓会広告」『函右日報』M一五・一二・二〇、『(雑報)師範学校卒業生同窓会』『静岡新聞』M一六・一・九
- (14) 「小言(四)人間果して住むに堪へざる乎」山路生『護教』M二四・一二・一二、『曾田氏東海曉鐘新報ヲ去ル』『静岡新聞』M一六・一・二八、『曾田愛三郎氏の遺書』『聖書之友雜誌』M二五・一・一六
- (15) 前掲・滝口源太郎『無題』(壬太郎追想文)『
- (16) 前掲「自から物せられし高木博士の伝記」、前掲『学校沿革史』、『高木壬太郎履歷書』《第一課文書 社寺》M三二(『東京都公文書館』、『本県録事』文部省賞与)『静岡大務新聞』M一七・一二・三〇、前掲『飄蓬録』、『父生活史』高木一三『高木壬太郎紀念録作成ノート』T一一(『東京神学大学』
- (17) 「学生ノ目的ヲ論ス」加藤瑞堂『静岡大務新聞』M一七・四・二五
- (18) 前掲『飄蓬録』、『日記』(M一九・七・一六)『

四 田舎官吏

- (1) 壬太郎『飄蓬録』M三三・八・五(『東京神学大学』、『自から物せられし高木博士の伝記』聖山生纂『開拓者』T一〇・四、河村八郎次『無題』(壬太郎追想文)』T一一(『東京神学大学』、『山梨易司編』『静岡県職員録』M一七・八

- (2) 『日記』(M一七・一〇・二〇、一〇・二九)、前掲『飄蓬録』
 - (3) 『日記』(M一九・四・一〇)』
 - (4) 『生の宗教』壬太郎『開拓者』T四・二一、「宗教の内的必要」壬太郎『護教』M四五・二・一九
 - (5) 『日記』(M一八・八・二)、『筆者宛大石壮太郎氏書簡』(S六三・五・三一)、『大石家の先祖を尋ねて・大石家の系図概略』(水井雅子氏)
 - (6) 『日記』(M二四・二・七、M一八・八・四)』
 - (7) 『相良紀行』壬太郎『護教』M三六・二・一四
 - (8) 河村八郎次『無題』(壬太郎追想文)』T一一、増田守一『追想』T一一〔東京神学大学〕
 - (9) 『日記』(M一八・八・一)、『雑録』高木壬太郎氏『東海曉鐘新報』M一八・八・一五、前掲『追想』
 - (10) 『霊の果』壬太郎『護教』M三四・四・六、『雑報』耶蘇教信徒の勉強『東海曉鐘新報』M一八・八・二七
 - (11) 前掲『自から物せられし高木博士の伝記』
 - (12) 『人生の一大時期』壬太郎『聖書之友雑誌』M二八・九、「向上の機」壬太郎『護教』M三八・六・三
 - (13) 『五十年を振り返りて』平岩愼保『日本伝道めぐみのあと』(卜部幾太郎編) S五、「教育ある信徒と教会と」(五) 壬太郎『護教』M三八・四・一
 - (14) 『平岩前監督のありし日を懷ふ』太田嘯風生『なみだ』(山口信義編)、「教会は家庭也」壬太郎『護教』M三五・七・一
- 九
- (15) 滝口源太郎『無題』(壬太郎追想文)』T一一〔東京神学大学〕
 - (16) 『静岡師範の二秀才』伊東圭一郎『東海三州の人物』T三、前掲『平岩前監督のありし日を懷ふ』、前掲『自から物せられし高木博士の伝記』、前掲『追憶』
 - (17) 『伊志田平三郎君を懷ふ』池田次郎吉『教界時報』T九・一・一五
 - (18) 『徳川氏Ⅱ対Ⅱ羅馬教』愛山生『野声反響』M二四・三、「今後の事業」壬太郎『護教』M三四・七・二三
 - (19) 『田舎牧師』愛山『護教』M二六・二・四
 - (20) 警醒社編『信仰三十年基督者列伝』T一〇、『日記』(M一九・二・一、四・一〇)、『前掲・河村八郎次『無題』(壬太郎追想文)』、『筆者宛高木智夫氏書簡』(S六三・二・一一)、『筆者宛大石壮太郎氏書簡』(S六三・三・一八)』

- (21) 「教育之部・雜錄」 私立静岡県教育会『静岡県隆美協会雑誌』M一八・一二・二六、「同」『静岡大務新聞』M一九・一・一二、「(広告) 在陵書生親睦会」『静岡大務新聞』M一九・一・二七

- (22) 「現代青年論」 山路愛山『新紀元』T二・七、「命耶罪耶(二二) 所謂静岡事件(九)」愛山生『国民新聞』M二八・四・一〇

- (23) 「種痘論」 壬太郎『静岡県隆美協会雑誌』M一八・一一、「日記(M一九・二・一二—三・一一)」

- (24) 「日記(M一九・三・二六)」

- (25) 「日記(M一九・五・一八)」前掲『追憶』

五 運命の関

- (1) 「命耶罪耶(一五) 所謂静岡事件(三三)」愛山生『国民新聞』M二八・三・二八、「現代思想史に於ける基督教の位置(四)」愛山『独立評論』M三八・五、「(雜報) 道路耶蘇演説」『静岡大務新聞』M一九・七・二五

- (2) 「日記(M一九・八・一六、一二・三一)」

- (3) 「村松一先生の行実」愛山『護教』T四・六・一八

- (4) 「教導石 建設広告」『静岡大務新聞』M一九・六・一七

- (5) 「人生の一大時期(上)」壬太郎『護教』M三四・一一・九

- (6) 「秩序ある生活」壬太郎『護教』M三八・一一・四

- (7) 倉長巍『平岩恒保伝』S一三、「自から物せられし高木博士の伝記」聖山生『開拓者』T一〇・四、「信仰の偉大」壬太郎『護教』M四五・七・一二

- (8) 前掲『日記(M一九・八・一六)』

- (9) 「新聞今昔譚(其三)」澁江保氏談話『独立評論』T三・四、

- (10) 「山路愛山」比屋根安定『教界三十五人像』S三四、「人格に文材を盛れ」壬太郎『日本及日本人』T五・九

- (11) 「我国に於ける将来の基督教」壬太郎『基督教世界』M四一・一〇・二九、「如何なる書籍に由て基督教の思想に接触せ

六 福音士

- (1) 『日記 (M二〇・一・一〇)』、『創立百周年記念誌』S四八 (三島市立東小学校)
 - (2) 「(彙報) 故青山学院長追悼会」『教界時報』T一一・六・一六
 - (3) 「今日の世の中」『絵入東海新聞』M二〇・六・一六、「知能を啓発し徳器を成就す」壬太郎『青山学報』T九・一二
 - (4) 「(広告) 絵入東海新聞」M二〇・八・一三、八・二四、八・二七、八・一八
 - (5) 「高木前院長記念祭」『青山学報』S七・二、「(広告) 宣教師 平岩愼保」『絵入東海新聞』M二〇・四・二二
 - (6) 「煩悶論 (中)」壬太郎『護教』M三九・三・三一、『日記 (M二四・七・八)』
 - (7) 「高木壬太郎履歷書」《第一課文書 社寺》M三一 (東京都公文書館)、「故青山学院長神学博士高木壬太郎君」池田次郎吉《明治初期の静岡 第二編》(静岡県立中央図書館)、松井豊吉編『日本メソヂスト静岡教会六拾年史』S九、間島弟彦《高木壬太郎君に関する追憶》T一一 (東京神学大学)
 - (8) 「使徒保羅の倫理説 (承前)」壬太郎『護教』M三三・六・一六
- * (高木坎堂) 先生の安息日論はカシデーと云ふ白人宣教師からやかましく云はれたることを記憶いたし候。(昔のしや (一)) 壬太郎『護教』M四二・一〇・一六、「信仰体験談」壬太郎『基督教世界』M三九・四・一二
- (12) 「わが父を語る (二) 心境の変化」高木二郎『広報 中川根』S三七・六
 - (13) 「基督教徒の品性」壬太郎『聖書之友雑誌』M二八・一〇
 - (14) 「人生の一大時期 (下)」壬太郎『護教』M三四・一一・一六
 - (15) 「基督教は実に余をして天地の人たらしめたりし也。余は唯に静岡県人なるのみに非ず、又日本人なるのみに非ず、天地の人也との思想を余に与へたるは基督教にして、此思想は凡ての事に於て余の理想を高めたりし也。」《飄蓬録》M三二・八・五 (東京神学大学)
 - (16) 「所感を述べて新年を迎ふ」壬太郎『聖書之友雑誌』M二九・一
 - (17) 「(雑報) 平岩銀子の葬儀」『静岡大務新聞』M一九・一一・六
 - (18) 「基督の復活」壬太郎『護教』M三五・四・五

- こと」山路生『護教』M四三・九・二四) ↓「実業界の伝道」M二六・一・七、「安息日に就て」M三六・九・二四 ともに『護教』の壬太郎文。
- (9) 基督教を信するに及で政治の念漸く薄し。以為く教育は最も必要にして余のまさに取る可きの天職也と。余は此時実に教育を以て天下に立んとしたりし也。然るに摂理の手は最も奇にして、余は遂に宗教家として天下に立つに至れり。"(《飄蓬録》M三二・八・五(東京神学大学))
- (10) 壬太郎『基督教ト進化説』M二一(東京神学大学)、「宗教家の自重」壬太郎『護教』M三八・二・一八
- (11) 故高木壬太郎博士の思ひ出」池田次郎吉『教界時報』T一〇・二・二五、「品性」と云ふ熟字の事」愛山『独立評論』M三九・一、「誤解乎。暗号乎。」「独立評論」M三九・四
- (12) 高木壬太郎編輯『心の写真 一名嗜好及性質之記録』M二一・三・三(池田春樹氏)
- (13) 『教報』日本メソヂスト教会年会』『基督教新聞』M二一・四・一八
- (14) 『教報』静岡青年会』『絵入東海新聞』M二一・四・一五、池田次郎吉『高木壬太郎先生』S七・二・八(青山学院資料センター)
- (15) 「自から物せられし高木博士の伝記」聖山生纂『開拓者』T一〇・四、「知識ヲ得ルノ法(承前)」『静岡青年会雑誌』M二一・八・一五(東京神学大学)
- (16) 「皇室と基督教と」『護教』M三八・五・一三、「教育と宗教的信念との關係」『婦一協会会報』T四・一一、「如何にして憲法發布三十年を記念すべきか」『中外新論』T八・二 以上、すべて壬太郎文
- (17) 「広告 基督教大演説会」『東海日報』M二二・三・一、「教報」静岡県藤枝教会堂奉堂式』『基督教新聞』M二二・五・三二
- (18) 「同好雑誌発行の趣意」斎藤和太郎『同好雑誌』M二二・五、「本会開会ノ旨赴ヲ告ク」岡田良一郎『静岡県国家学会論纂』M二二・六
- (19) 西館武雄『二法一元論』M二一、「基督教主義学校論(下)」壬太郎『護教』M三八・八・五
- (20) 前掲「自から物せられし高木博士の伝記」
- (21) 『隨筆』(明治二十二年九月から十二月までの壬太郎の備忘録)(高木智夫氏)

【凡例】

○ 引用文中、漢字は原則として新字体に改め、仮名づかいは原文にしたがった。

○ 壬太郎没後「紀念録」作成にあたり、壬太郎の「備忘録」（未見）より抜き書きしたもの（東京神学大学蔵）を『日記』と記した。

記号表

〃 …… 壬太郎文から引用

〈 〉 …… 他の文献から引用

《 》 …… 草稿・書簡・公文書など

〔 〕 …… 所蔵先（者）名など

（Ⅱ） …… 筆者による注

M…明治、T…大正、S…昭和

高木壬太郎

一八六四—一九二一 明治大正期の神学者、教育家。遠江国榛原郡中川根村に生まれる。静岡師範学校在学中に山路愛山と詩文雑誌『呉山一峰』を創刊。御殿場の小学校長時代、自由民権運動に奔走。八六年静岡メソヂスト教会で平岩愼保より洗礼を受ける。八九年上京し、東洋英和学校に学ぶ。九五年から三年間カナダのヴィクトリア大学留学（新約聖書神学専攻、一九〇六年神学博士号取得）。帰国後、東洋英和学校、青山学院教授を務め、一三年青山学院長に就任。上京以来この間、築地、麻布、中央会堂、駒込各教会牧師およびメソヂスト派機関紙『護教』の主筆として活躍。『基督教大辞典』（二一）を編纂。著書『ジョン・ウエスレー伝』『基督教の品性』『基督教安心論』『生活と宗教』など。

〔川崎司〕

『岩波キリスト教辞典』二〇〇二（岩波書店）